

独自のスタイル

モン・サン・ミッシェル(ミカエル)修道院は他の修道院とは全く異なるスタイルを持つ、まさにユニークなモニュメントだといえるでしょう。このモニュメントの建設担当者たちは、ピラミッド型の山の形を考慮しながら花崗岩の周囲を包み込むように修道院を建設しました。

修道院に付属する長さ80mの教会は最上階にあり、その重みを支えるプラットフォームの役を果たす礼拝堂に上の建てられています。

メルヴェイユの棟は修道院建築の至宝ともいわれ、四階わたる二つの棟を傾斜した岩にたてかけることに成功した13世紀の建築家たちの高度な水準を物語っています。非常に綿密な技術的配慮がその成功もたらしたといえましょう。一階にある貯蔵室の狭い側廊*は控え壁の役を果たしています。西棟の二階と三階の基礎は重なり合う構造で、上へ向かうほど軽くなる構造になっています。建物の外側は強力な控え壁*に支えられています。

建築スタイルは修道院内の生活規範にも影響を受けています。修道僧がその生活の規範とするベネディクトゥスの規範*は彼らが祈りと仕事に没頭できるよう考慮されています。各部屋はこの修道院の生活規範に合わせて作られました。一般の信徒を受け入れる部屋はメルヴェイユの棟の一階と二階に作られました。このモン・サン・ミッシェル修道院は、修道僧の生活と地理的条件という大きな二つの要素を優先させて建設されました。

*側廊
身廊の側面部分

*控え壁
壁を支えるために
突き出している柱

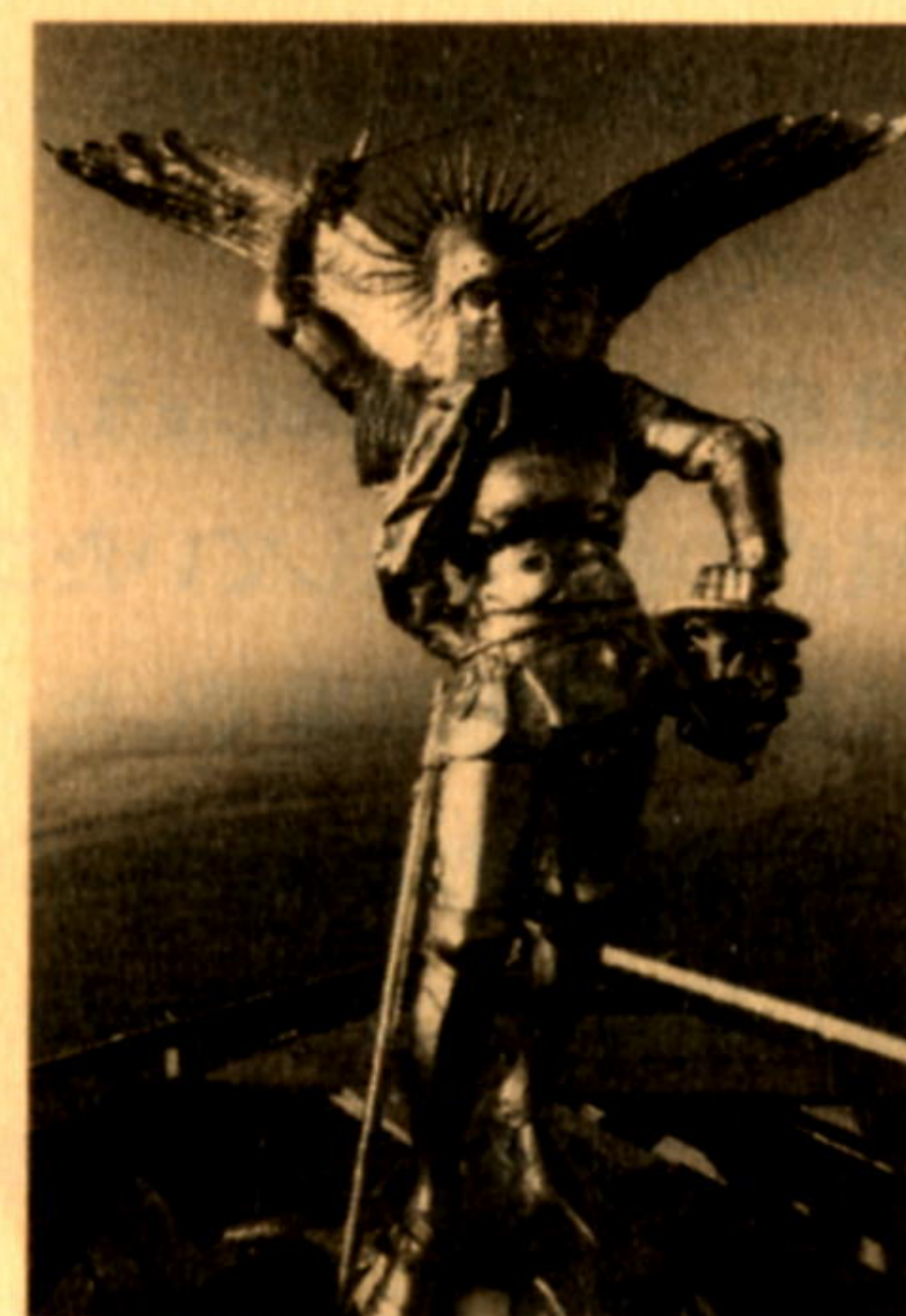
*ベネディクトゥス
の規範
西暦6世紀
カシノ山(イタリア)の
修道院で
ベネディクトゥスにより
制定されたこの規範は、
祈りと仕事を規定し、
ベネディクト会の
修道者たちにより
監視されています。

建築

大天使ミカエル(サン・ミッシェル)

ミカエルの崇拝

中世の宗教的観念において天使の軍団長であるミカエルは大きな影響を及ぼしました。新約聖書においてミカエルはヨハネの黙示録に登場し、悪魔の象徴である竜と戦いそれを打ち倒します。来世への不安を抱えながら生きていた中世の人々にとってミカエルは、死者を導き、最後の審判を迎えた日の魂を癒すとされていました。4世紀以来ローマ帝国に幅広く行き渡っていたこのミカエルに対する崇拝は、492年にカシノ山(イタリア)で最初の聖堂が建設されたのをきっかけとしてヨーロッパへ浸透し始めました。



1000年頃にはミカエルを奉った教会やチャペルがヨーロッパ各地の特に丘や台地に頻繁に建設されました。英国との100年戦争が終わり、山を守り続けたという事実も手伝い、ミカエルへの崇拝観念は

特殊な次元を持つようになりました。また反宗教改革をきっかけとして、カトリック教会にとってプロテスタントに対抗できるのは天使の軍団のみであるという新しい観念も生まれました。キリスト教に関連した書物の中でミカエルはよく剣と秤を持った姿で描かれています。伝統と一般信仰がミカエルを騎士団長とみなす一方で、兵器や秤に関連した職業を生み出し発展させました。鐘塔の上に突き出るようにして立つミカエル像には、大天使としての伝統的特性を見い出すことができます。この像は1897年、32mにおよぶ新しい尖塔を飾るため建築家ヴィクトル・プティグランの要請により彫刻家エマニュエル・フレミエによって製作されたものです。この像は1987年に修復され現在に至っています。

Centre des
monuments nationaux
Abbaye du Mont-
Saint-Michel
50116 Le Mont-Saint-
Michel
tél. 02 33 89 80 00
fax 02 33 70 83 08

www.monuments-
nationaux.fr

CENTRE DES MONUMENTS NATIONAUX

日本語

モン・サン・ミッシェル修道院

アヴランシュの司教オベールにより大天使を奉る聖堂がトンプ山に建設された708年、モン・サン・ミッシェルの長い歴史が始まりました。トンプ山は間もなく大規模な巡礼地となり、10世紀にはベネディクト会の修道僧がそこに居を構えるようになる一方、山の下方に向かって村が広がっていき、14世紀には岸壁にまで至っていました。英国との100年戦争



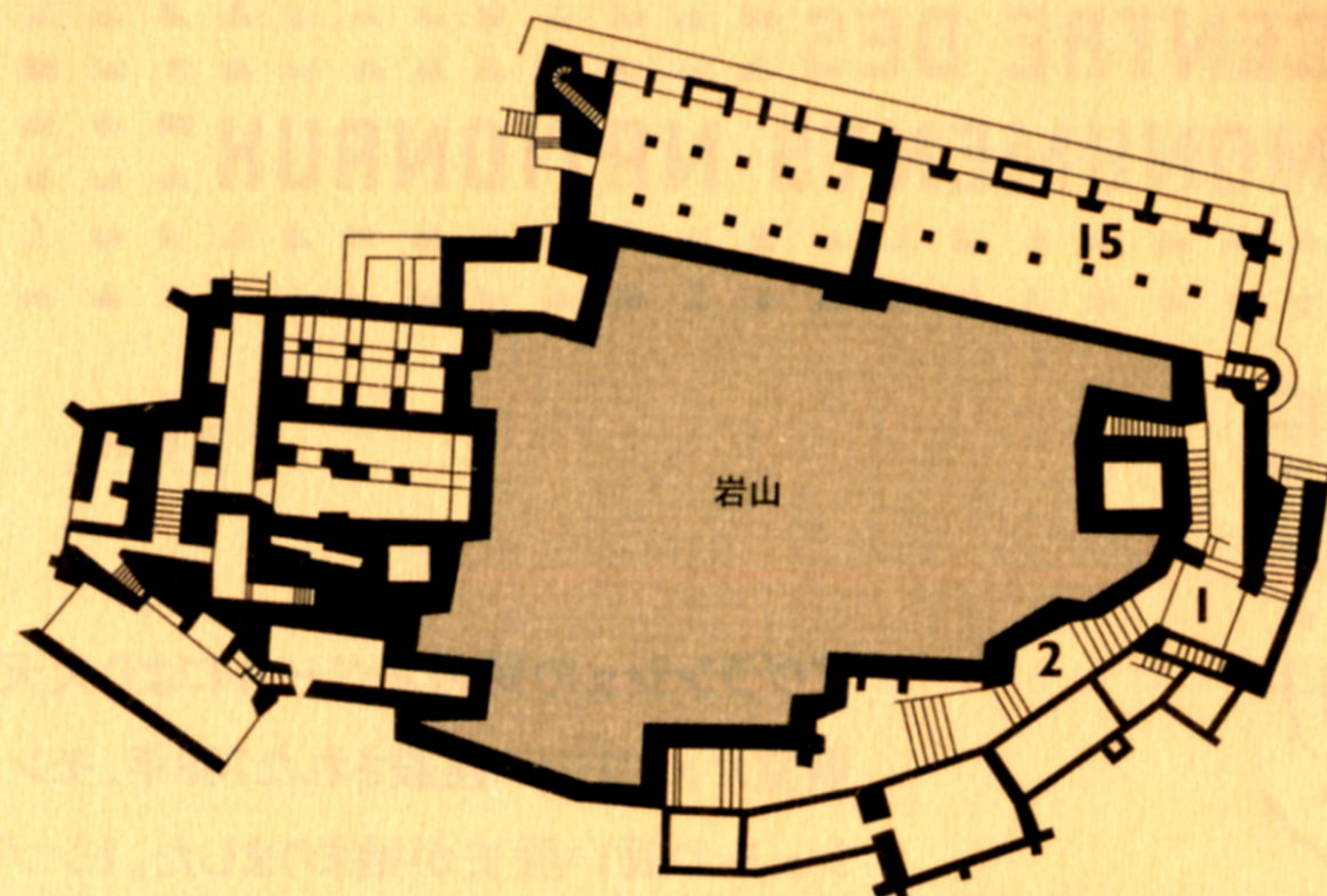
の際にも遂に侵攻されることになったモン・サン・ミッシェルは、同時に軍事建築の代表例であるともいえましょう。

英国の攻撃を完璧に防御した防壁や要塞を構えるモン・サン・ミッシェルは、フランス国家のアイデンティティーを象徴しているといえます。フランス革命による修道会の散会から1863年までの間、修道院は監獄として使用されました。1874年、歴史建造物に指定され大がかりな修復工事が始められて以来、現在でも工事が続いています。この修復工事により、中世の人々が地上に具現された天空のエルサレム、天国の象徴とみなしていた素晴らしい修道院を皆様に見学していただけます。

1979年よりモン・サン・ミッシェルはユネスコの世界文化遺産に指定されています。

歴史

下階



要塞を施された修道院の入口ともいえる哨兵の間・1・を通り大階段・2・を登るとソー・ゴチエのテラスへです。そこから吊橋で連結された教会(右側)と修道僧の居住棟の間を進みます。14世紀から16世紀にかけて建設されたこの居住棟は元来、修道院の幹部たちが居住していました。

西のテラス・3・は教会の外郭と18世紀の火災で焼け残った身廊の前三列から成っています。クラシックなファサードは1780年に再建されています。ここからの眺めは湾を望み、ブルターニュの西方カンカルの岩礁、東側にはノルマンディーの岸壁、また南西に広がるドル山の花崗岩盤やトンプレーヌの小島を北方に見渡すことができます。沖には修道院の建設に使用された石材の採石場があったショセー群島の姿も見えます。

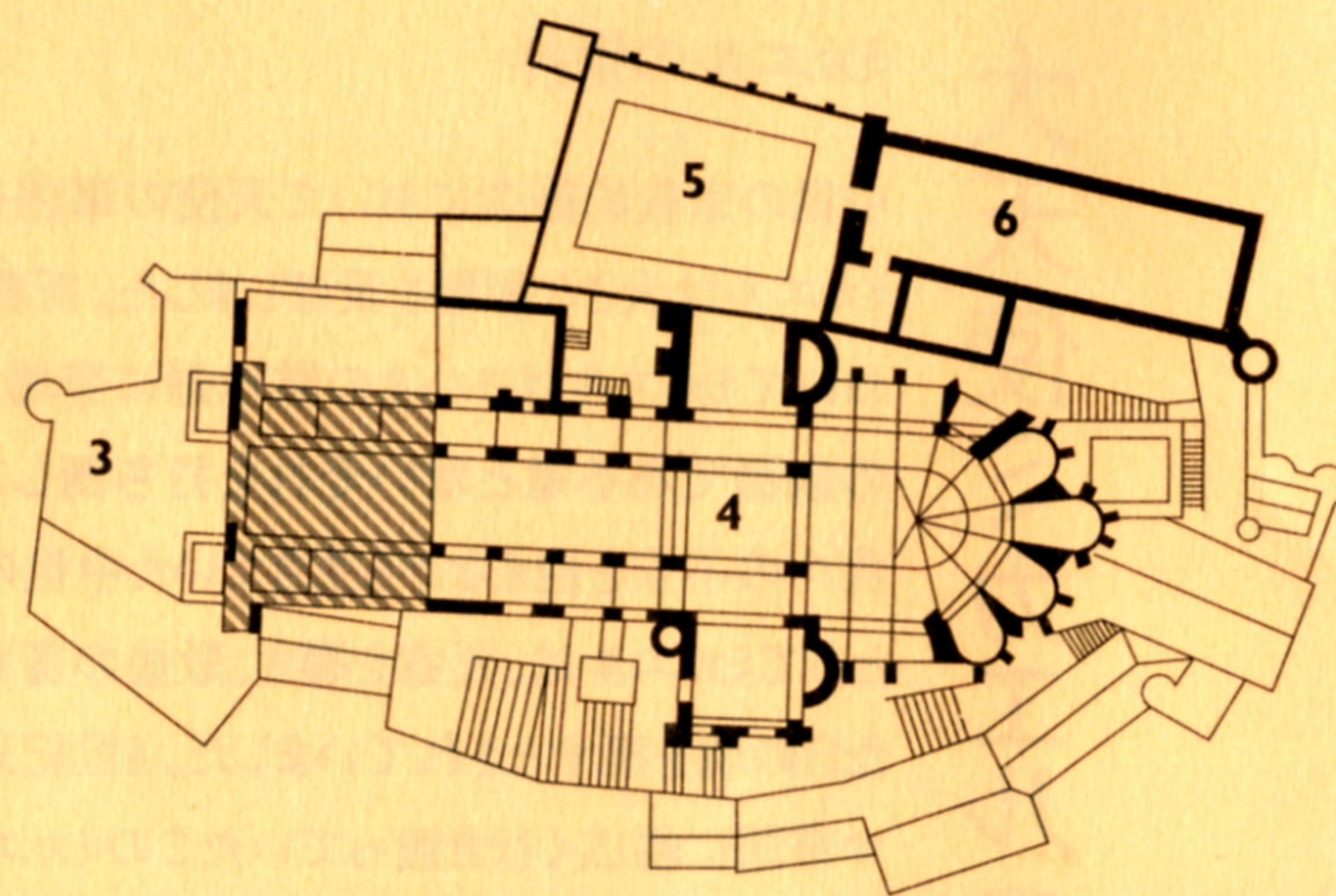
テラスからは、1897年に完成したネオゴシック様式の尖塔と鐘楼、金メッキを施されたミカエルの像が見えます。

1000年より1010年の間に建設された修道院付属の教会・4・は標高80mを誇る岩山の頂上、長さ80mにおよぶ土台上にあります。身廊ではアーケード、階廊席、高窓の3段階に渡る建築様式を見学していただけます。

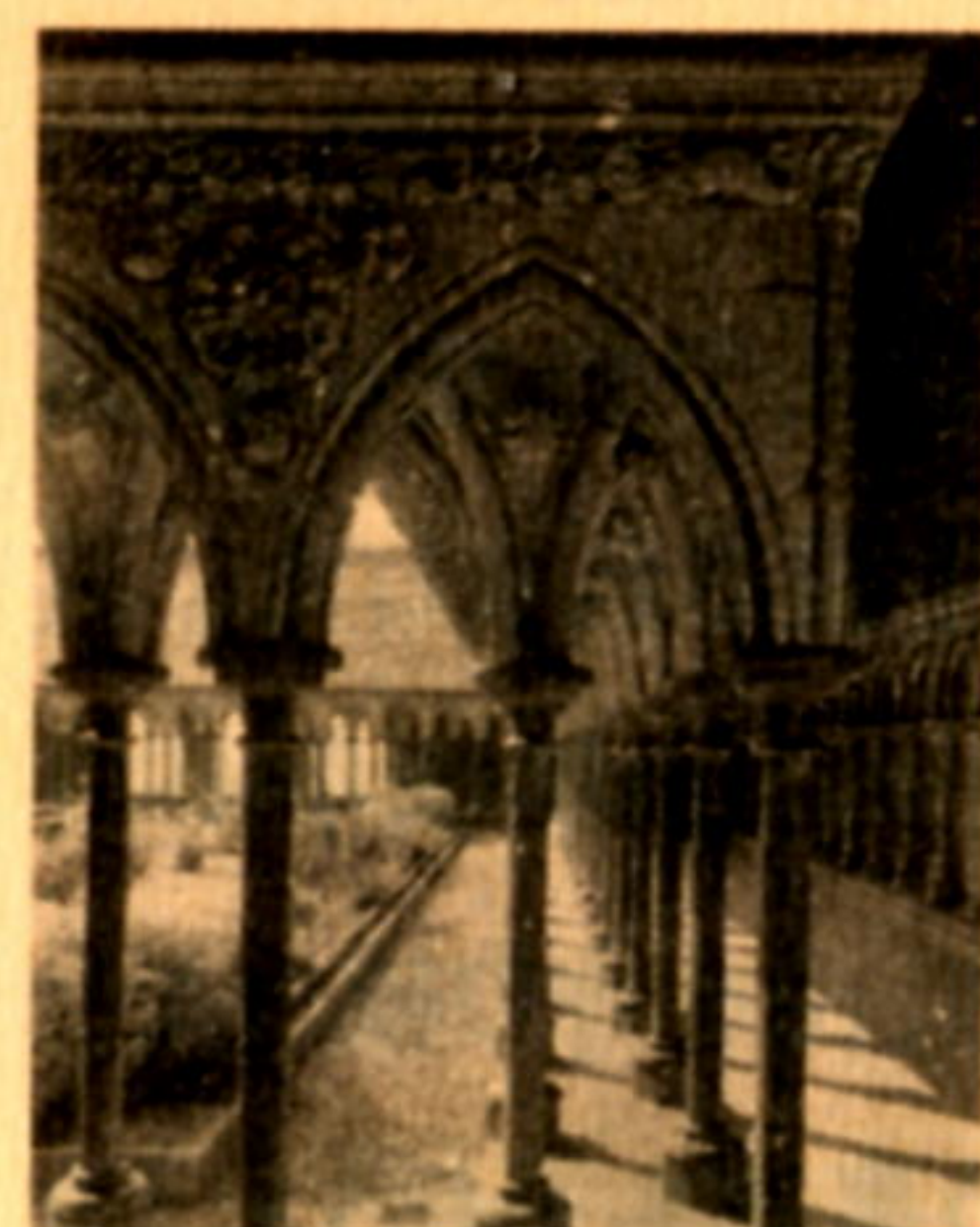


案内書にそってお進み下さい。

上階



*板張りヴォールト
薄い板で覆われた
曲面天井

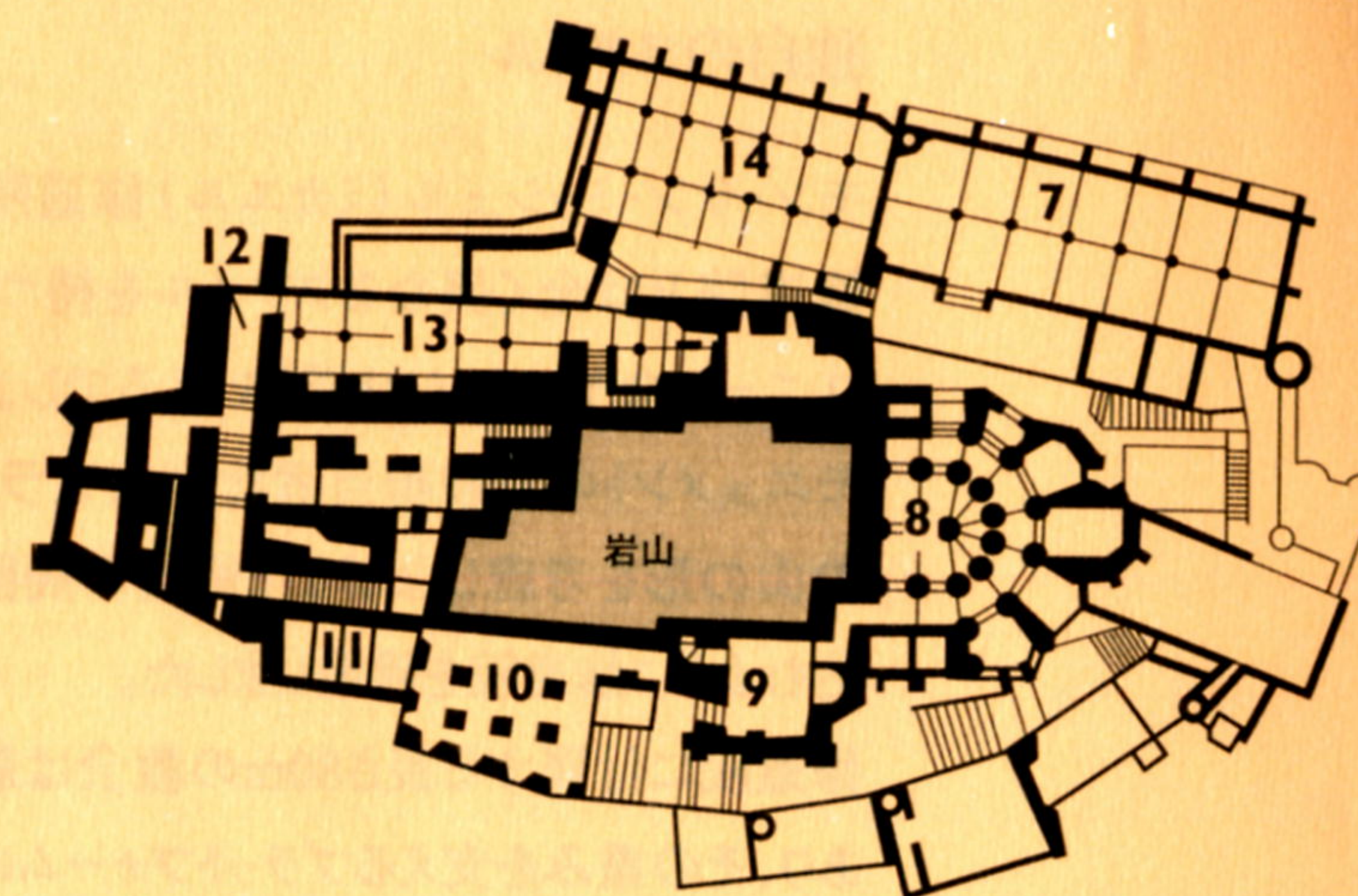


身廊の天井は板張りヴォールト*で、1421年に崩壊したロマネスク様式の内陣は100年戦争後にフランポアイヤン式ゴシック・スタイルで再建されました。

列柱廊・5・に進みましょう。別の棟へ行くための分岐点の役を果たしていたこのギャラリーは、かつては祈りと瞑想の場でした。祝祭日にはここで礼拝の行進が行われました。この列柱廊は、13世紀初頭に建設された「メルヴェイユの棟」の最上階に位置しています。ここから食堂、厨房、教会、寝室、古文書保管室そしてさまざまな階段へとつながっています。西方には海に面した大きな窓がありますが、ここは未建設におわった教会参事会室への連絡通路になるはずでした。

列柱は重量を軽くするため骨組みには木材が使用されています。わずかにずれながら二列に組まれた小円柱が常に変化する視覚効果を生んでいます。南壁の司教座で一人の僧が読唱する間、食堂・6・で他の修道僧たちは沈黙のうちに食事をとっていました。この食堂の側壁には幅の狭い窓をうがってありますが、入口からは見えません。階段を降りると迎賓の間・7・へです。ちょうど食堂の真下にあたるこの間は、王や貴族たちを迎えるための部屋でした。次は太柱の礼拝堂・8・です。ここは修道院付属教会のゴシック式内陣を支える土台として15世紀半ばに作られました。

中間階



*交差廊
身廊と内陣の間を
横断する部分

*納骨堂
墓地から
取り出した人骨を
積み重ねていた
部屋

マルティヌス礼拝堂・9・は修道院付属教会の南側の交差廊*の土台として1000年に建設されました。この礼拝堂の高さ9mの円天井には圧倒させられます。

マルティヌス礼拝堂からかつて修道僧の納骨堂・10・であった大きな車輪のある通路へ進みます。これは修道院が牢獄として使われていた1820年、囚人用の食物を上階に運搬するために設置されたもので、中世の工事現場で使用されていた車輪のレプリカです。

14世紀初頭に崩壊した医務室と修道僧の納骨堂の間にあるのがステファヌスのチャペル・11・で、死者のためのチャペルでした。

南・北階段・12・を通り西のテラスの下にです。ここはロマネスク修道院の中軸ともいえる修道僧の遊歩場・13・で、二つの身廊を持つ長いホールです。この円天井は交差リブになっており、12世紀初頭に生まれたゴシック建築の到来を告げています。

メルヴェイユの棟へ戻り、騎士の間・14・へ入ります。列柱を支えるために建設され、ここで修道僧たちは仕事をしたり執務に励みました。アヴランシュに保存されていた手書きの文献の数々が修道院に戻ってきており見学することができます。最後は司祭館・15・です。迎賓の間の下に位置し、ここで修道僧たちは下層階級の人々やあらゆる巡礼者たちを迎えていました。

参考文献:

LE MONT-SAINT-MICHEL
Henry Decaëns
Coll. "Itinéraires du patrimoine" Éditions du patrimoine 1997

À LA DÉCOUVERTE DU MONT-SAINT-MICHEL
Olivier Mignon
Editions Siloë 1999